

『おくのほそ道』試論 —— 上野・谷中の花の梢 ——

宇城 由文

一、花の梢

弥生も末の七日、明ぼの、空朧々として、月ハ有あけにてひかりおさまれる物から、富士の峰幽に見えて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。

『おくのほそ道』の旅立ちの箇所である。江戸への離別をいまだ臉に残るとき一連の表現に仕上げている事である。しかし、解釈論の立場ではなく作品の成立論の視点に立って考える時、いささか気に掛かる箇所でもある。元禄二年は閏一月があり、旅立ちの三月二十七日は太陽暦だと五月十七日にあたる（日本暦日原典）。この時期にまだ桜が咲いていたとは考えがたい。江戸の春

の象徴としての「桜」に別れを告げるのであれば理解できる。だが、「弥生もく送る」までの文はひとまとまりの表現であり、「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし」は眼前の桜への離別を表すものである。紀行文を書くにあたって、まずは旅路における実際の感動が優先されよう。それゆえに疑問が残るのである。

元禄二年の江戸の桜の開花を示す資料は管見の限りでは知らない。元禄二年二月十九日付け交慰宛木因書簡に「漸十八日二東山の花見物罷出候」として京・奈良の花見の記述が見られる。年次は阿部正美推定によるものがぼぼまちがいないと考える。

東山花見覚

清水 西門の山桜 花九分の盛

ふくろう手水鉢の前 糸桜 花十式分盛過

地主の桜山は九分名ある桜ハ花式分

ぶたいの下山桜花八分名ある桜つぼミ斗

おとわ 奥の千手同前

丸山 山桜花九分

霊山

知音院 門前の山桜花八分

堂の前名木は花壺分式分

祇園林のひがん桜 花十式三分盛過

御神前の山桜花十分 名木の桜花三分

とあり、桜の種類と場所により多少の時差はあるが花見時分といえる。直前に訪れた奈良については

南都は八十二三四日式分、八重桜ハつぼミ、山桜花八分二と候。

ともある。また、元禄二年二月十一日付(年次は推定)

無名宛丈草書簡に、京に移って初めての春を迎えた丈草が「去年の冬も此春もそれほど寒く不存候」とあり、穏やかな春であったことが知られる。一方江戸の方は、

『鈴木修理日記』によると、元禄二年は、正月一六、閏

正月一小、二月一小、三月一小とあり、日々の天候を記す中で閏正月四日午前の雪以降、二月、三月に雪の記録は見えない。やはり穏やかな春であったと考えられるが、江戸の桜の開花を示す資料ではない。江戸の桜の花盛りを知るには、京と江戸の桜の時差を知る必要がある。

時は少し下るが、元禄十二年三月廿七日付東暇宛惟然書簡に「一兩日已前にあはて、東山に飛まはれば、」として「花もなふすこしの分がまだなんぼ」の句を記す。この年の京の桜は、中旬に開花、二十日過ぎが花盛りとあったところか。一方江戸の方であるが、『隆光僧正日記』には、元禄十二年三月十八日の記録に「三之丸へ御成、御花見之御振廻也」、二十四日の記録に「手前二而花見」とあり、『徳川実記』の同年三月十八日の記録にも「三丸ならせ給ひ花の宴あり」とある。桜においては京と江戸はほぼ同時期に咲いていたと推定される。これらのことから、元禄二年の江戸の桜は二月二十日前後が見頃で、月末には散っていたと推定される。しかし、「花の梢」の一節を考えるためには江戸の開花時期を知るだけでは十分とは言えない。

二、奥羽行脚への想い

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえむと、そゞろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置。

この冒頭文および奥羽行脚の行程に関連する芭蕉書簡を眺めながら、芭蕉の奥羽行脚への想いを考えてみたい。

何とぞ北国下向之節立寄候而成、関あたりより成とも

通路いたし、しみく可申上候。

(元禄二年正月十七日付松尾半左衛門宛)

芭蕉の実兄に宛てた手紙である。現存資料として奥羽行脚の計画を知る最初のものとしてされている。これ以降立ちまでの間に記された書簡の中に、奥羽行脚への想いが度々語られる。

去年の秋より、心にかゝりておもふ事のみ多きゆへ、却而御無きたに成行候。(中略)更科紀行の思い出としは明ても猶旅の心ちやまず。

元日は田毎の日こそ恋しけれ

弥生に至り、待侘候塩竈の桜、松島の臘月、あさかぬまのかつみふくころより北の国にめぐり、秋の初、冬までには、みの・おはりへ出候。(中略)猶ことしのたびはやつしくて、こもをかふるべき心がけにて御坐候。其上能道づれ、堅固の修行、道の風雅の乞食尋出し、隣庵に朝夕かたり候而、此僧にさそはれ、ことしもわらぢにてとしをくらし可申と、うれしくたのもしく、あたゝかなるを待侘て居申候。(中略)尚々江

戸御下被成候はゞ、節句過には拙者は発足仕候間、それまでに候はゞ懸御目度候。

(元禄二年閏正月頃、猿雖「推定」宛)

伊賀の門人に宛てた手紙である。出発は節句過ぎとあり、旅の行程もかなり具体的になってきている。この年の三月三日は太陽暦でいえば四月二十二日(日本暦日原典)、この頃に出発すれば、まだ塩竈の桜に間に合ったのであろう。また「やつしくて、こもをかぶるべき心がけ」と新たな旅に対する姿勢も記している。隣庵にいる僧とは路通のことである。実際の奥羽行脚の同伴者は曾良一人であるが、この時点では路通を、或いは路通も同伴する予定であった。傍線部は細道の冒頭文にかかわる箇所、波線部は旅程にかかわる箇所である(以下同様)。

(前文略) 拙者三月節句過早々、松嶋の朧月見にとおもひ立候。白川・塩竈の桜、御浦やましかるべく候。

欄木良医師一伝奉頼候。仙台より北陸道・みのへ出申候而、草臥申候はゞ又其元へ立寄申事も可有御坐候。もはや其元より御状被遣まじく候。

(元禄二年二月十五日付桐葉宛)
出発予定は節句過ぎで変更はないが旅程がより具体化している。

(前文略) 魚くはぬ腹のさらくとして、土筆・よめ菜の萌出るにも、又、野心とゞまらず候。住果ぬよの中、行処婦処、何につながら何にもつれむ。江戸の人さへまだるく成て、又能因法師・西行上人のきびすの痛もおもひ知んと、松嶋の月の朧なるうち、塩竈の桜ちらぬ先にと、そゞろにいそがしく候。(中略)

道の具

短冊百枚 是かつゑたる日、五銭・十銭と代なす物
か

筆箱一 雨用意ござ・鉢のこ

柱杖 是二色乞食支度

ひの木笠・茶の羽織、如何

(元禄二年二月十六日付惣七郎「猿雖」・宗無宛)
いよいよ近づく旅立ちに心落ち着かぬ心情がよく表れている。そのための精進生活も伺える。また、「道の具」

としてあげられたものは細道本文の中に出てくるものと重なる。

(前文略) 野生とし明候へば、又くたびごちそゞろになりて、松嶋一見のおもひやまず、此廿六日、江上を立出候。みちのく・三越路之風流佳人もあれかしとのみに候。

はるけきたび寝の空をおもふにも、心に障んものいかゞと、先衣更着末、草庵を人にゆづる。此人なん妻をぐし、むすめをもちたりければ、草庵のかはれるやうおかしくて、

草の戸も住かはる世や雛の家

三月廿三日

ばせを

御連中、可然頼存候。取込候故一紙申残候。

(元禄二年三月二十三日付落梧宛)

前出の二月十六日付書簡からこの書簡までの間に旅立ちの予定が変更になった。その事情は次の資料によって知られる。

翁陸奥の哥枕見む事をおもひ立侍りて、日比住ける芭蕉庵の庵を先破り捨、しばらく我茶庵に移り侍る程、猶其筋餘寒ありて白川のたよりに告こす人もありければ、多病心もとなしと、弥生末つかたまで引きとゞめて

花の陰我草の戸や旅はじめ

(杉風自筆詠草)

芭蕉のパトロンの存在であった杉風が、奥羽行脚で芭蕉が立ち寄りそうな所へ書簡を送り、旅先の情報を事前に集めていたと想像される資料である。太陽暦の四月二十二日であれば、江戸は暖かくなっていたであろうが、白川あたりはまだ寒さは残っていたであろう。日程変更の理由がこれがすべてであるかどうかは不明である。

以上のように、現在に伝わる芭蕉書簡の中に、『奥のほそ道』の冒頭箇所に見られる松島や白川の地名が度々登場する。また「旅の心ちやまず」「そゞろ」「心にかゝりて」など重なる表現も多い。二月十六日付書簡の「能因法師・西行上人のきびすの痛もおもひ知ん」は冒頭箇所「古人も多く旅に死せるあり」に通じるものである

う。「三里に灸すゆる」も、元禄二年四月二十六日付杉風宛芭蕉書簡の中で「発足前に灸能覚申候」とあることから事実と確認できる。また、旅先に関する事前の調べもしていたであろう。『おくのほそ道』の冒頭から日光までの間で、実際に体験しないと書けないのは、離別を記す箇所、仏五左右衛門の箇所、うらみの滝の箇所ぐらいである。理屈の上では旅立ち前にこの部分のメモを作ることは可能である。旅の立前に芭蕉の頭の中にあり手紙にも記した事が、作品を書くにあたって使用されるのはいたって自然の事ではある。反転すれば、作品に取り入れるべき旅中の事柄が旅立ち前にすでに選択されていたともいえる。奥羽行脚の計画と『おくのほそ道』の構想が平行して進んでいたと解釈することも可能ではなからうか。

三、「道の日記」の方法

芭蕉の道の日記に対する考えは以下の文章でよく知られている。

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼

の、文をふるひ情を盡してより、余は皆佛似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれくもいふべく覚侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずバ云事なかれ。

（『笈の小文』）

紀貫之の『土佐日記』、当時鴨長明作とされていた『海道記』や『東関紀行』、阿仏尼の『十六夜日記』が道の日記の手本であり、一個の作品としての意識が強く、ただ旅の事実を記すだけの道の日記には価値を認めていない。

元禄二年以前の芭蕉の旅を記したものとしては、貞享元年から二年にかけての旅を記した『野ざらし紀行』、貞享四年の鹿島への小旅行を記した『鹿島詣』、貞享四年から翌年にかけての旅を記した『笈の小文』、貞享五年の秋の旅を記した『吏科紀行』がある。それぞれの作品の成立は何度も推敲が加えられた後となる。

道の日記の創作方法について言えば、すでに『野ざら

し紀行』の時からそうであったように、旅の折々に書き留めておいた前書付きの句や句入りの俳文をもとに構成を考え何度も推敲を繰り返しながら完成へと向かう。それらの句文は芭蕉真蹟として、写しとして、または弟子たちの上梓した俳書の一部として現在に伝わる。『おくのほそ道』について言えば、冒頭の「草の戸も」の句は前出の落梧宛芭蕉書簡が初案で、『世中百韻』『一葉集』に載るものが再案とされている。その他「木啄も」の句文や「世の人の」の句文など数多く残されている。第二章で引用した書簡類もその一部といえよう。このような芭蕉の創作姿勢を踏まえながら『おくのほそ道』の構想について考えてみたい。

『おくのほそ道』の成立については、元禄五年頃に執筆が始まり、元禄六年に草稿が成ったというのが定説となっており、これに異を唱えるものではないが、構想は旅立ち前からあったのではと考える。まずこの奥羽行脚は芭蕉の生涯でもっとも大きな旅であり、それ以前の主な旅は紀行文に仕上げてきた事、前出書簡に見られるように「ことしのたびはやつし〜て、こもをかぶるべき

心がけて」という清貧の決意で臨んでいる点、これにあわせて旅立ちにあたっての送別もごくごく質素なものにしている点、以上のことをあわせ考えると、確証はないものの、すでに旅立ち前から『おくのほそ道』の構想が芭蕉の頭の中にあつたと考える方が自然ではなからうか。もちろんその内容がどの程度のものであつたかは想像の域を出ない。

四、芭蕉の仕掛け

最初の問題に立ち返る。奥羽行脚をした元禄二年から芭蕉が他界する元禄七年までの間で、三月以前に閏月があるのは元禄二年のみである。これほどの体験的事実を芭蕉が忘れて平年の年と勘違いしたとは考えがたい。「上野・谷中の花の梢」、芭蕉は何故臨場感に欠ける桜を書き入れたのであろうか。

『おくのほそ道』解釈事典』はこの「花の梢」に関して、

(イ) 現実に花が咲いているとする説

(ロ) 咲いているが、満開は過ぎていているとする説

(ハ) 遅桜もしくは満開を過ぎた桜が残っていたと考
える説

(二) 時期的に判断し、咲いていないとする説

の四説を挙げ、「(一) 説が大勢となっている。(中略)
近年では、花が咲いていたか、咲いていなかったのか、
という事実を問題にするのではなく、「花の梢」を、文
章の中でどのように解釈すべきなのかという点について
の論が、いくつか発表されている」として諸氏の論を紹介
している。事実云々ではなく作品の中で解釈するとい
う点においては筆者もこれに異論はない。ここで問題に
しているのは、この文章がどのようにして成立したかとい
う点である。もとより句文などが残存していればこの
ような考察は不要であるが、なきが故に関連資料によ
る検討にも一定の意義があると考ええる。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞のあり
しも、私意をはなれよといふ事也。此習へといふ所を
己がまゝにとりて、終に習はざるなり。習へといふは、
物に入てその微の顕れて情感るや、句と成る所也。た

とへば、ものにあらはにいひ出ても、そのものより自
然に出る情にあらざれば、物我二つに成りて、その情
誠に不至。私意のなす作意也。(三冊子・赤)

飛花落葉の散りみだるゝも、その中にして見とめ、聞
きとめざれば、おさまると、その活きたる物消て跡な
し。(三冊子・赤)

右は芭蕉の句作論として伝わるものだが、俳諧観でも
ある。前出書簡に度々記され、奥羽行脚のポイントでも
ある白河の関について見れば、実際には古関の跡が見つ
からず右往左往しようだが(曾良随行日記)、古関に
ついての話を創ることもせず、故事・古歌によって白河
の関越えを記している。日付や行程の順はともかく、現
実のその場その場における感動を全くの想像によって創
作するとは考えにくい。ましてや『おくのほそ道』は歌
枕を媒体として自らの宇宙を紡ぎだそうと試みた作品で
ある。「花の梢」にこだわるのもそれ故である。

一章で示したように、元禄二年の桜は二月の二十日頃
が見ごろで、月末にはほぼ散っていたと推定される。た

だ、前出書簡にも見られるように桜も種類によって開花期に多少のずれがある。芭蕉が杉風の採茶庵に移ったのは衣更着末（前出落梧宛書簡）である。このことを杉風は自筆詠草の中で「芭蕉の）旅はじめ」と句に詠んでいる。芭蕉も思いを共有していたと考える。芭蕉庵も処分した。二章での芭蕉書簡を通してわかるように、芭蕉の奥羽行脚への想いは強く、旅への期待、昂揚感はいよいよ高まっていたであろう。旅立ちの予定変更がどの時期なのかは定かではないが、採茶庵に移って日を置かない時期に江戸への離別の草稿が書かれたのではないかと推定する。「物のみへたる光、いまだ心にきへざる中にいひとむべし」（三冊子）で、まさにその場に臨んで得た江戸への離別の思いである。ところが現実の旅立ちの時にはすでに桜はない。そこで、本格的に稿を成すにあたって、芭蕉はある仕掛けを施す。それが「今年元禄二とせにや」であり、日光の「卅日」であろう。前者は従来から言われている臘化法であり、後者は創作である。あたかもこの年の三月が大の月であるかのように思わせる。すると元禄二年という年次すら危うくなる。元禄二

年の三月は小の月で二十九日までである。筆者の管見の限りでは、日記類の小の月の末の表現は、「二十九日」もしくは「廿九日」で「卅日」「晦日」は知らない。一般の文章とは区別されていると思われる。この二つの仕掛けによって、閏一月の存在は薄れ、平年の三月としての読みが可能になる。元禄二年に閏正月があったことを記憶している人にも、平年の年として読んでくださいよ、という芭蕉のメッセージである。三月中旬に桜が咲き、三月下旬の出立の際に惜春・郷愁の情とともに「花の梢」を想うのはいたって自然の表現として解釈できる。

旅立ちまでの書簡に何度も「桜」が見られる。この桜への想いが「花の梢」の一節を入れた理由であろう。結局塩竈の桜を見ることはかなわなかったが、六月八日、月山で待望の遅咲きの桜に出会う。

（二〇一三・一一・二五記）

引用文献・参考文献

松尾芭蕉集② 紀行・日記編 俳文編 連句編 小学館、二〇〇三年 七月刊

今榮藏著 芭蕉書簡大成 角川書店 二〇〇五年 十月刊

- 俳人の書画美術 第三卷 蕉門諸家 集英社 一九八〇年五月刊
- 飯田正二編 蕉門俳人書簡集 桜風社 一七七二年 四月刊
- 近世庶民生活史料 未刊日記集成 第四卷（鈴木修理日記二）
三一書房 一九九八年 一月刊
- 資料纂集 隆光僧正日記 第二 統群書類従完成会 一七七〇年 三月刊
- 校本芭蕉全集 第七卷 俳論編 角川書店 一九六九年 六月刊
- 堀切実編 『おくのほそ道』 解釈事典 東京堂出版 二〇〇三年 八月刊
- 新訂増補国史大系四三 徳川実紀第六篇 吉川弘文館 一九六五年 八月刊
- 内田正男編著 日本暦日原典 雄山閣 一七七五年 七月刊